

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 2日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009年度～2012年度

課題番号：21401019

研究課題名（和文） ローベルト・ムージルの文学と中央ヨーロッパの諸都市の研究

研究課題名（英文） Die Literarischen Werke Robert Musils und die Städte der Mitteleuropa

研究代表者

早坂 七緒（Hayasaka Nanao）

中央大学・理工学部・教授

研究者番号：30108104

研究成果の概要（和文）：旧ハプスブルク帝国の諸地域にまたがるローベルト・ムージル（1880年～1942年）の足跡をたどり、作品との関連および作品解釈の新しい可能性を発見した。成果は学術図書“Robert Musil und der genius loci”（Wilhelm Fink社）として発表し、多大の反響を得た。その後も論文「補遺1」「補遺2」として成果を公表している。

研究成果の概要（英文）：Durch Recherchen der Städte und Orte der ehemaligen Habsburgischen Monarchie, in den die Fußspuren Robert Musils (1880-1942) blieben, wurden viele Zusammenhänge mit seinen Werken und Möglichkeiten, sie zu interpretieren, entdeckt. Die Ergebnisse wurden als eine Monographie „Robert Musil und der genius loci“ (Wilhelm Fink, 2011) publiziert und erhielten positive Reaktionen. Die ergänzenden Errungenschaften danach wurden als „Nachträge 1“ und „Nachträge 2“ veröffentlicht.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：ドイツ文学

キーワード：ローベルト・ムージル、ウィーン、モデルネ、モラヴィア、亡命文学、伝記的研究

## 1. 研究開始当初の背景

（1）20世紀のドイツ語圏における最高の小説（1999年のアンケート調査結果）と位置づけられる『特性のない男』の著者ローベルト・ムージル（1880～1942年）の生涯は、半分出来上ったジグソーパズルの様相を呈していた。死後に再評価されるまで十数年経過したため、未亡人マルタも亡くなり（マルタがムージルの日記を「検閲」して破棄や改竄を行なった形跡もある）、詳しい事情を知

る人がいなくなったためでもある。彼の「日記」は創作ノートの性格を帯びており、事実の記録はむしろ僅少である。友人、知人ほかの聞き取り調査により K.ディンクラーゲ（1960年）、W.ベルクハーン（1963年）そして膨大な調査により K.コリーノ（2003年）がムージルの伝記（原書2000頁）を発表してきた。それでも失われたピースは多数にのぼると推測された。それと関連して作品解釈の可能性も限定されていた。

(2) 代表者は在外研究(1994~1996年)および科研費(2002~2005年)による現地調査の結果、すでにコリーノの伝記の記述を1ダース以上訂正していた。

(3) 代表者はすでに当時の新聞に掲載されたムージル17歳、18歳の作品を掘り起こし、ムージルの祖父母の日記や遺言書を発見するなどし、それら功績にたいして2005年クラゲンフルト市(ムージル生誕の地)よりローベルト・ムージル・メダルが授与された。またデジタル版新全集の編集・発行人の一人に加えられている。ムージル文学館はじめ、各地、各国の研究者たちとコンタクトを取りあっていた。

(4) 代表者は当時コリーノの『ムージル 伝記』を翻訳していた(訳者代表、共訳者11名)。固有名詞への注は原書にないが、邦訳ではほぼすべての固有名詞に注を施していた。本研究の副産物として、不明だった固有名詞の属性が明らかになることが期待された。

## 2. 研究の目的

(1) ムージルの生涯の各時期および作品の背景、解釈の可能性について、汲み尽くされていないものを、おもに現地調査によって掘り出してゆく。①ムージルは亡命の地ジュネーヴで脳溢血のために死んだとされているが、医師による死亡診断書は公表されていない。この死亡診断書を入手し、憶測(自殺説もある)を退けたい。②短編「ポルトガルの女」(1923年)のモデルとなった女性を探索する。③「文化擁護のための国際作家会議」が開催されたパリでの講演(1935年)には草稿が5つある。当時の状況を調査して講演草稿のゆらぎを検証する。当時ムージルが滞在したチャーチ邸(ヴィユ・ダブレイ)も調査する。④セルジョ・セルジの案内によりムージルが見学したローマの精神病院を調査し、『特性のない男』の主要な人物モースブルガーの造形との関連をさぐる。

(2) これまでの研究の結果(論文10篇)とあわせて、本研究の成果を単行本として発行する。これは、国際ローベルト・ムージル学会の機関誌(Musil-Forum)に論文を投稿した際に掲載を断られたためでもあり、さらに以前に掲載された際には図版が改竄されるなどの被害をこうむったためでもある。

(3) 欧米の研究者たちに伍して、日本人も積極的に情報を発信できることを示し、一方通行でない、真の学術国際交流を実現するよう微力を尽くしたい。

## 3. 研究の方法

(1) ムージルが滞在した都市の住居を訪ね、実測により平面図を作成する。市図書館の協力を得て当時の市街図から住環境を把握す

る。郷土史家等から往時の当該地域に関する情報を得る。各国のムージル研究家の協力を得て、伝記的理解を深め、ムージルの文学作品の理解の修正を図り、さらに新たな解釈の可能性を探る。①ボルツァーノ(イタリア)。イジドーラ荘でムージル夫妻は、参謀部将校ベヒャー夫妻と共同生活をしていた。どのような生活形態だったのか等を推測するため、地下室や屋根裏まで調査する。1985年に古書店で発見された、一箱分のムージル夫妻あて郵便物の由来も調べたい。当時の定期刊行物にムージルの作品が掲載されているかどうかも調査したい。②クラゲンフルト(オーストリア)。ムージルの生家(現ムージル文学館)について調査する。③リンツ。ムージルの母ヘルミーネの実家であるベルガウアー一家について調査する。以前から特定されていない「アンナ」について、アンニーナ・ローレンツの可能性はないか調査する。④ジュネーヴ。市図書館にあるムージル関係書類を入手する(2012年まで公開不可)。ムージルの死亡診断書を入手する。⑤パリ。1935年に開催された「文化擁護のための国際作家会議」の会場となった共催会館を調査する。当時ムージルが滞在した、後援者チャーチ夫妻の別邸(ヴィユ・ダブレイ)についても調査する。⑥ベルリン。ムージルは学生時代(1903~1908年)、『新展望』(Die Neue Rundschau)編集者時代(1914年)と『特性のない男』執筆時代(1930~1933年)の三期にわたってベルリンに滞在している。それぞれの時期について住居、周辺事情などを調査する。

## 4. 研究成果

(1) 1695年のマテイ・ムシルの死亡記録まで遡る、ムージル家の家系図を原簿電子データ等により作成。これは現在世界でもっとも詳しいムージル家系図である(モラヴィア州図書館、ヤン・ムシル、チャキ博士ほかの協力による)。

(2) グラーツ近郊のプラッヘルホーフ(祖父マティアス・ムージルが経営した農場)の母屋を現地調査し、平面図等を作成。プラッヘルホーフをムージル研究家が調査したのは初めてである。

(3) ムージルが生地クラゲンフルトを再訪しなかった謎について。当時の鉄鋼産業の記録を調査し、父アルフレートが同地の工場の所長代理として主にリストラに従事していたため、餓首した元同僚に会うのを避けたためと推定した。

(4) ベルリンの住居について。学生時代の1906年~1908年の4つの住居はアルフレート・ケルの住居を遠巻きにする位置にあり、師匠ケルを抛り所にしたいというムージルの心理が推測される。1914年の住居

(Amsel-Haus)は陰鬱で、作品「黒つぐみ」の閉塞感が理解できる。1930年代に滞在したペンション・シュテルンのあった建物の各部屋まで現地調査。きわめて快適かつ静謐でムージルが創作に集中できたことが理解できた。戯曲『熱狂家たち』が初演された都心劇場、『ヴィンツェンツ』が初演されたルストシュピールハウスについてもベルリン州文書館にて図面ほかを取得、出演した俳優についてもベルリン芸術アカデミー等で調査し、当時の上演の様相をかなりの程度再現した。

(5) シュラートミングおよびフィルツモースを調査。19歳のムージルがヴァレリー・ヒルパート(少佐夫人のモデル)を契機に体験した別の状態の萌芽について、画期的な解釈を提出した。ムージル関係者からは反論がないが、むしろ黙殺されている状態である。

(6) 1917年にムージル中尉が滞在したポストイナ(スロヴェニア)の住居を調査。作品「スロヴェニアの村の葬式」に描写された壁が「ポンペイの赤」に塗られていた部屋を特定し、葬儀の際に歌われたスロヴェニア語の賛美歌「わが母マリア」の楽譜も入手。当時の状況も考慮してこの作品の新しい解釈を打ち出した。これについてはシュトルツ博士(元ムージル文書館長)が賛意を表している。

(7) ジュネーヴの戸籍役場および州文書館にてムージル関連の資料(死後70年の2012年に公開可となった)を収集。しかし医師による死亡診断書は死後100年まで公開不可とする新しい措置により、入手できなかった。ただし戸籍役場の記録では意図的に死因について言及しておらず、また州文書館にあるメモによればムージルのカードは「特別枠」にあり、自殺説の傍証となりうることが分かった。

(8) その他多数の新発見も含めて成果は学術図書“Robert Musil und der genius loci”としてWilhelm Fink社より2011年に刊行された。それ以降の成果は「補遺(Nachträge) 1」および同2(印刷中)に発表された。著書は権威あるローヴォルト社のRobert Musil(オリヴァー・プフォーホルマン著、2012年)の巻末参考文献一覧の3「伝記、全体的記述、同時代の証言」に挙げられた11冊のうちの1冊となっている。またヨーゼフ・シュトルツ博士の近刊Vulkanische Menschen (Kitab, 2013年)の巻末研究書一覧では主要文献(Standardliteratur)として太字で印刷されている(ほか10冊)。さらにゾーアカムプ社の最新刊Robert Musil, Die Verwirrungen des Zöglings Törleß. Text und Kommentar, Suhrkamp BasisBibliothek(ローベルト・ムージル『生徒テルレスの混乱』テキストと注釈、オリヴ

ァー・プフォーホルマン著、2013年)の巻末には参考文献(抜粋)の40冊の1冊に挙げられている。国際ローベルト・ムージル学会のホームページでは、現在も冒頭にポップアップで呈示される3冊の本の一冊となっている。また同HPの書評欄にシュトルツ博士のきわめて好意的な書評が掲載されている。個々のムージル研究者から私信として多くのポジティブな評価が寄せられた。カピッツァ博士(ミュンヘン)の言葉のみ引用する。「いまやムージル研究は、文字通り確実な地盤を踏まえて活動することができます。そしてそれはあなたの功績です」。とはいえ欧米全体の傾向としては、黙殺に近いと思われる。日本では日本独文学会「ドイツ文学 146号」(2013年3月)において桂元嗣氏が、異例の4頁半にわたる書評により本書を高く評価している。また第8回オーストリア文学会賞が本書に対して5月下旬に授与される予定である。

(9) 本書を出版するにあたり(詳述は避けるが)、清書、校正そして出版後の献本にいたるまで、代表者は多大の困難を克服しなければならなかった。すでに確立しているドイツ人の学説に対して日本人が修正を加えたり新説を唱えたりすることがいかに困難かを痛感した。しかし関係諸機関はこのような状況がなかなか理解できず、また研究者仲間にも経験を共有する者がなく、ほぼ孤独の戦いとなった。今後は日本の研究者たちが「発信型」の仕事に、より比重をかけるよう希望するとともに、国際的には「フェアな」意見交換により、真に生産的な学術国際交流が実現することを希望する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 早坂七緒 Robert Musil und der genius loci – Nachträge 2 – 人文研紀要、中央大学人文科学研究所、査読無、75号、2013年、印刷中

② 早坂七緒 Robert Musil und der genius loci – Nachträge ドイツ文化、中央大学ドイツ学会、査読無、67号、2012年、1-14頁

③ 早坂七緒 “Ein süß ohnmächtiges Brennen“ in Filzmoos und Schladming – Was war Musils „Valerie-Erlebnis“? – ドイツ文化、中央大学ドイツ学会、査読無、65号、2010年、1-20頁

〔学会発表〕(計3件)

① 早坂七緒 「ジュネーヴにおけるムージル」(仮題)、日本オーストリア文学会、2013年9月27日、北海道大学

②早坂七緒 「『ローベルト・ムージルと土地の神』およびそのミステリー」中央大学ドイツ学会、2013年3月21日、中央大学駿河台記念館

③ 早坂七緒 „Verallgemeinerung der Persönlichkeitseigenschaften durch Robert Musils ‚konstruktive Ironie‘“ IVG (ドイツ語ドイツ文学国際学会・ワルシャワ) 2010年8月3日、ワルシャワ大学

〔図書〕(計1件)

早坂七緒 Wilhelm Fink 社 Robert Musil und der genius loci 2011年、415頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.musilgesellschaft.at/>

<http://www.musilgesellschaft.at/rezensionen.htm>

[http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nanaacor/deutsch/top\\_main.html](http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nanaacor/deutsch/top_main.html)

① オーストリアの新聞 Standard に Reisen zu Musils Futterplätzen (ムージルの餌場への旅) と題してオリヴァー・プフォールマン氏が新刊紹介、2011年12月16日

② ドイツの新聞 Frankfurter Allgemeine (フランクフルト一般新聞) に Musils Futterplätze (ムージルの餌場) と題してオリヴァー・プフォールマン氏が短評、2011年11月24日

③ オーストリアの新聞 Kleine Zeitung が Musil und die Kärntner Moleküle (ムージルとケルンテンの分子) と題して、インタビュー形式で2頁にわたり“Robert Musil und der genius loci”と早坂七緒について紹介、2011年12月1日

④ ドイツの放送局 K1 が「カカーニエン」(ムージルが小説中でオーストリアに授けた呼び名)をテーマに新刊紹介。最後の3冊目に“Robert Musil und der genius loci”を紹介、2011年11月19日

⑤ ドイツの Die Landshuter Zeitung の文学面に Musils Futterplätze — Ein japanischer Germanist auf den Spuren des „Mannes ohne Eigenschaften“ (ムージルの餌場 日本のゲルマニストが『特性のない男』の足跡を追う) と題してオリヴァー・プフォールマン氏が書評、2012年3月17日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

早坂七緒 (HAYASAKA NANA O)

中央大学・理工学部・教授

研究者番号：30108104

### (2) 研究協力者

① Josef Strutz Dr. (オーストリア)

② Eva-Marie Csáky Dr. (オーストリア)

③ Ulrike Ehrlich Mg. (オーストリア)

④ Zdeněk Mareček PhDr. (チェコ)

⑤ Zbyněk Sviták Dr. (チェコ)

⑥ Stefan Imhoof PhDr. (スイス)

他に各地の州文書館、市文書館職員等の積極的な協力を得たが、膨大になるので名前を挙げることは断念する。